

# 企画展「東洋の医・健・美」

会期：2023年5月31日（水）～9月18日（月・祝）  
 会場：東洋文庫ミュージアム  
 主催：公益財団法人東洋文庫、読売新聞社、  
 第124回日本医史学会大会

2023年5月31日（水）～9月18日（月・祝）の期間、東洋文庫ミュージアムにて企画展「東洋の医・健・美」を開催します。

本展では、古来アジアの人々がどのように不調や怪我、病気と向き合ってきたのかを、東洋文庫が所蔵する医療史の名著でたどります。



## みどころ

### ①東洋伝統医学の見方がかわる!?

東洋医学ってあまりなじみがない、漢方薬って効くの遅いし、本当に効果があるの？と思っている人も少なくないかもしれません。しかし、生薬を自分の身体で試して効果を見定めてきた歴史や、病気にならないように予防する考え方は東洋医学から来ています。

### ②東洋文庫にしか伝存のない鍼灸治療の教科書！



現代でも参照されている鍼灸治療の教科書の、現存最古の刊本を展示します。こちらは東洋文庫にしか所蔵がありません。また、著名な医師の旧蔵本も多数ご紹介します。

I 滑寿撰『十四經發揮』1604（慶長9）年刊 古活字印

### ③『解体新書』、翻訳元の『ターヘル・アナトミア』、扉絵元の『人体解剖図詳解』3点セットでご覧いただけます！



II 杉田玄白ほか訳『解体新書』1774（安永3）年刊



III ワルエルダ『人体解剖図詳解』1566年 アントワープ刊



IV ヨハン・アダム・クルムス『解剖図表（通称ターヘル・アナトミア）』1734年 アムステルダム刊

# 展示構成

## 1章 東アジア伝統医学の発展

中国の古代王朝、「殷（紀元前17世紀頃－前1046）」の存在が明らかになったのは、古代の文字が刻まれた亀や牛の骨が大量に出土したからでした。甲骨に刻まれた古代文字の甲骨文字は、占いの内容を記していました。まずは「王の歯痛について」占った甲骨卜辞片などをご覧ください。



V 『甲骨卜辞片』 前14－前11世紀頃 殷墟（河南省安陽市）出土

中国では少なくとも戦国時代末期（前3世紀頃）には、内科医、外科医といった専門医について記された書物があることから、この時期には占いによる診断治療からの脱却があったことがみてとれます。さらに後漢（25－220）にかけて、後の中国伝統医学の基礎となる医学書が次々と確立します。総合医学書の『黄帝内経』、生薬について書かれた『神農本草経』、伝染病について記された『傷寒論』の3つは中国伝統医学の三大古典というべきものです。



VI 王冰注『補注黄帝内経』 前漢（紀元前206年－8年）成立 1783年（乾隆年間）以降刊



VII 『神農本草経』 1－2世紀頃成立か 作者未詳 1854年刊



VIII 張仲景著 王叔和撰『傷寒論』 1715（正徳5）年序 日本刊

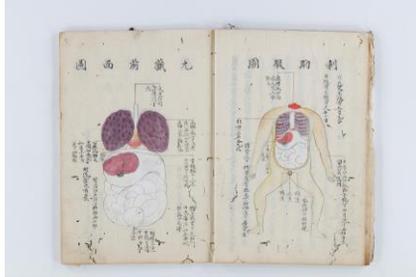
また、生薬による内科治療や、外科治療、鍼灸治療だけでなく、食事や運動で健康状態を整える「養生」も重視されてきました。こうした考え方は、朝鮮や日本にも伝わり、やがてその地の環境に適応した治療、養生法が確立されていきました。



IX 忽思慧『飲膳正要』 1320年（元代）成立 20世紀刊

## 2章 日本一近世以前の医術

日本で本格的に医療行為が広まったのは、室町末から江戸時代以降で、その端緒となった人物が曲直瀬道三（1507-94）です。その後江戸初期まで主流であった元明時代の医学に対し、それ以前の古典の医書に立ち戻れとして、漢代の医書『傷寒論』を推奨する一派「古方派」が登場してきます。その一人、日本で初めて人体解剖を行った山脇東洋（1705-62）の解剖書『蔵志』や、同じく古方派の医師で後に世界で初めて全身麻酔による乳がんの手術を成功させた華岡青洲（1760-1835）の著作などをご紹介します。



X 山脇東洋『蔵志』書写年不明



XI 華岡青洲『乳岩図説』書写年不明

## 3章 ヨーロッパへの針灸医学の伝播—出島での異文化接触

清では鍼灸治療が衰退したため、ヨーロッパに伝わるアジアの情報の中で、鍼灸については日本からの情報が多くありました。テン・ライネ、ケンペル、シーボルトなど、オランダ東インド会社から派遣されて長崎出島のオランダ商館に滞在した医師たちの著作が、当時のヨーロッパ人たちが参照する文献となりました。彼らの商取引記録や著書、その他出島で翻訳されたユニークな解剖図などもご紹介します。



XII 宇田川玄眞『和蘭内景医範提綱銅版図』1808年刊



XIII ヨハン・レメリン『小宇宙鑑』1639年刊 第3版

## 4章 美容—健やかに、美しく粧う

人が健やかで美しい容貌であろうとすることは、古今東西共通の願いです。しかし、「美」に対する価値観、目的、方法は、地域や時代によって様々です。経済活動や都市型の生活が栄えた江戸時代後半には、江戸を中心に庶民にも化粧が普及しました。人々が流行を取り入れた、自己表現をするようになっていく一方で、「お歯黒」のような古来の慣習的な化粧法は、明治時代まで続きました。



XIV 水島ト也ほか編『粧眉作口伝』17世紀後半（江戸時代）成立 書写年不明



XV 並木正三著 浅野高造補著『容顔美艶考』1819年刊（初版は1814年）

# 広報用画像の申し込みについて

## <画像使用全般に関する注意>

- 本展広報目的での使用に限ります（会期終了まで）。使用後はデータの廃棄をお願いいたします。
- 企画展名、会期、会場、画像・クレジット（所蔵先）は必ず記載してください。
- 転載、再放送など、二次使用される場合は別途申請をお願いいたします。
- Webサイトに掲載する場合は必ずコピーガードを施し、「画像の無断転載を禁じます」旨を表記してください。
- 基本情報、画像使用などの確認のため、ゲラ刷り・原稿段階のものを担当者にお送りください。
- 掲載・放送後は必ず掲載紙（誌）、同録DVDを担当者までお送りください。

## <広報画像クレジット一覧>

- （1点のみ掲載の場合）公益財団法人東洋文庫蔵  
（2点以上掲載する場合）すべて公益財団法人東洋文庫蔵 を必ずご記載ください。

## <広報用画像一覧>※画像は本文をご覧ください

番号	クレジット
□Ⅰ	滑寿撰『十四経發揮』1604（慶長9）年刊 古活字印
□Ⅱ	杉田玄白ほか訳『解体新書』1774（安永3）年刊
□Ⅲ	ワルエルダ『人体解剖図詳解』1566年 アントワープ刊
□Ⅳ	ヨハン・アダム・クルムス『解剖図表（通称ターヘル・アナトミア）』1734年 アムステルダム刊
□Ⅴ	『甲骨卜辞片』前14－前11世紀頃 殷墟（河南省安陽県）出土
□Ⅵ	王冰注『補注黄帝内経』前漢（紀元前206年－8年）成立 1783年（乾隆年間）以降刊
□Ⅶ	『神農本草経』1－2世紀頃成立か 作者未詳 1854年刊
□Ⅷ	張仲景著 王叔和撰『傷寒論』1715（正徳5）年序 日本刊
□Ⅸ	忽思慧『飲膳正要』1320年（元代）成立 20世紀刊
□Ⅹ	山脇東洋『蔵志』書写年不明
□Ⅺ	華岡青洲『乳岩図説』書写年不明
□Ⅻ	宇田川玄眞『和蘭内景医範提綱 銅版図』1808年刊
□ⅩⅢ	ヨハン・レメリン『小宇宙鑑』1639年刊 第3版
□ⅩⅣ	水島ト也ほか編『粧眉作口伝』17世紀後半（江戸時代）成立 書写年不明
□ⅩⅤ	並木正三著 浅野高造補著『容顔美艶考』1819年刊（初版は1814年）
□ⅩⅥ	メインビジュアル※クレジット不要

上記資料画像を広報素材として提供いたします。  
下記申し込みフォーム、またはQRコードよりお申込みください。  
<https://forms.gle/bXgF6WNzGSbzPR6P8>



報道に関するお問い合わせ

03-3942-0328 (TEL)    [shinoki@toyo-bunko.or.jp](mailto:shinoki@toyo-bunko.or.jp) (E-mail)    担当者：普及展示部 篠木